

2014年春休み友情のレポーター ヨルダン取材レポート

太田 成美（静岡県／当時14歳）

～感謝～

1. ヨルダン到着

飛行機で一日かけてやっとヨルダンに到着した。

ー初めてヨルダンに来て感じたことー

- ・アンマン空港が予想外にもきれいで、少し驚いた。
- ・日本のこの時期とそんなに変わらない気候だったが、乾燥していた。
- ・初めてヨルダンの町並みをみたが、やはり日本と雰囲気というものが違った。
- ・ヨルダンは、四角い日干しの家で自然が少ない。

これから始まる取材に期待と不安が混ざっていた。ヨルダンの第一印象は、行く前に比べて良かった。

2. ヨルダンのホテル

ー様「ヨルダン」の取材という事なので、私が滞在したヨルダンのホテルについて少し書いておこうと思う。

滞在したホテル・・・トレドホテル（アンマン市内）

ここのホテルはアンマン市内の街の通りに建っていた。ロビーの作りがオシャレにアラビアンぽくなっていて、（きれいだな。よく工夫してあるな）と思った。

◎良かった点◎

- ・十日間滞在したが、毎日きれいに掃除してくれてあったので嬉しかった。
 - ・従業員の人がよく挨拶してくれた。
- ⇒・その際に、英語で「Good Morning!」と言ってくれたので、自分も返すことができた。
- ・トレドホテルは、宿泊客がかなり多くアメリカや中国など色々な国の人に来ていた。
- だからみんな英語で話す。

◎悪かった点◎

- ・隣の部屋の音がよく聞こえた。
- ・カードキーの調子が悪く、ドアを開けられないこともあった。

思ったこと

今回泊まったホテルは日本とそんなに変わらない。ただ、ホテルがヨルダンの方がフレンドリーで親切だったと、そういう違いは見られた。

上記に良かった点、悪かった点を書いたが、今回宿泊したホテルは、ザアタリ難民キャンプからここに戻ってくるとき申し訳ない気持ちでいっぱいだった。なぜなら、キャンプで散々分かったように取材しておきながら、自分はそこで泊まらずにさっさと豪華なホテルへ引き返してしまうことに、強い抵抗を感じたからだ。

3. 食べ物

ヨルダンの食べ物は、もちろん日本にはないものが多く、どれもとてもおいしかった。

気になったこと

- ヨルダンの料理はとてもおいしかったが、食べたくても食べられないものがあった。難民キャンプで売っていたアイスクリームも食べられなかったし、生野菜も食べられなかった。全て自分の体を守るためと思っても、ヨルダンの人と少し距離を置いていると感じてしまう自分がいた。
- 現地ではいくつものレストラン、ファーストフード店に入ったが、かなり量が多い。それだけに自分も残してしまったし、遺跡遠足のキャンプの子どもたちも、普通に残していた。さらに、あるファーストフード店では、外に大きな容器があって、そこにボンボン食べ残しが積み込まれており、ジュースの中身もでていた。自分の国に難民キャンプがあるというのに、これでいいのだろうかと思った。

4. 気候&風景

★ヨルダンの特徴的な気候★

ヨルダンは、とても乾燥している。髪を洗っても、すぐにパサパサしてしまっていて、特にキャンプでは砂ぼこりもあって、それがひどかった。

だから雨も、十日間ずっとふらなかった。真っ青な青空が広がっていた。一番辛かったのは、朝晩と日中の気温差が激しかったことだ。自分はこれにうまく調整することができなかった。だから風邪をひいてしまったのかもしれない。しかし、ヨルダンはイスラム教で、頭、全身に布を巻いている人がとても多い。自分も巻いてみたがかなり暑い。よく我慢できるな、と思う。だからヨルダンの人は汗をたくさんかき、体臭がきついのかと思った。また、難民キャンプでは近年、プレハブが多いが、テントもまだある。朝晩寒くないのか気になった。

★ヨルダンの風景★

取材中、車での移動が多かったので、ヨルダンの景色をじっくり眺めることができた。

私たちが宿泊したトレドホテルのあるアンマンは、首都なだけにしっかりした建物（コンクリートっぽい）が多かった。しかし、街を抜け、ザアタリ難民キャンプへ向かって行くと、景色が少しずつ変わっていった。建物が少なくなり、砂漠が現れた。途中、羊やラクダも見かけた。放牧をしている所もあり、移動式テントのようなものもいくつか建っていた。アンマン近郊に比べてザアタリ難民キャンプ付近は自然が少ない子どもたちが自然と接する機会も減るだろう、と思った。また、ホテルからキャンプまでは1時間以上かかった。なんだか、ヨルダンがキャンプと距離をおいているように見えたのは、気のせいだろうか。

5. 難民家族の取材（アンマン近郊）

ヨルダンに来て一番最初に私たちは、私たちは、ザアタリ難民キャンプではなく、アンマン近郊に独立して生活している家族を取材した。ここでは、「なぜキャンプではなく、ここを選んだか」というところにも注目してみた。

訪問1 ～予想外な心の強さ～

- ・訪問した家族…ベリリさん（27）父親
アスマさん（19）母親
シャベリリ（1年3カ月）娘

一番最初に口を開いたのは、お母さんのアスマさんだった。
彼女は、まだ19歳なのに、しっかりした表情で私たちの取材に応えてくれた。

◆被害を受けたお父さんと残された二人◆

父親であるベリリさんは、反政府デモ側についていた。
だからベリリさんは政府に捕まってしまう、刑務所に一時期はいったという。
彼の手には、その時に受けた虐待の傷がまだ残っている。辛い、母と娘は捕まらずに、ボートや徒歩で非難した。一日以上かかり、その道のりはとてもきつく、疲れる。母親のアスリさんが、よく赤ちゃんつれて、一人で非難できたな、と私は思った。また、シリアとヨルダンの国境を越える時は、夜でないと見つかってしまう、と言っていた。奇跡的に三人は合流し、今に至っている。家族と一緒に居られることが嬉しい、と言っていたが、確かにシャベリリちゃんと遊んでいるとき、この家族はどこにでもいる幸せな家庭に見えた。

感じたこと

今まで楽しくシャベリリちゃんとジャレ合っていたベリリさんも、刑務所の話になると、それもなくなり笑顔も消え、肩に力が入っている感じだった。（やっぱり、辛い事なんだ。思い出したくない事を、私は聞いてしまっているのだ。）とその時に改め

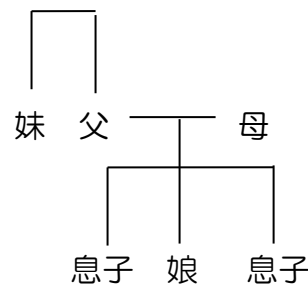
て思った。そんな肩身の狭くなるような質問をしているのに、最後までしゃんとたたずんでいたのは、お母さんのアマスさんだった。取材をしている時も、私の目をちゃんと見てくれて、「質問している」というよりも「語っている」という感じだった。なぜこんなに冷静にいられたのかな、と今になって疑問に思う。彼女たちの心の強さに、私は感動した。

家の様子…ベリリさんたちは、シェアハウスのように、他の家族と共に暮している。しかし、家の中はがらんとしていて、ほとんどのものという物がなかった。毎日どんな生活を送っているのだろう。

訪問2 ～笑顔を見せない～

・家族構成・

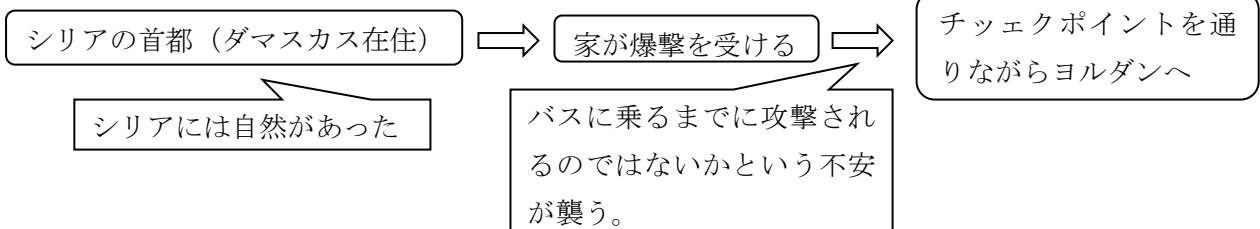
- ワシームさん (30) 父親
- ウォファさん (27) 母親
- ムハンマドくん (7) 息子
- ヒバちゃん (5) 娘
- ナリマンくん (4ヶ月) 息子
- ファニマさん (20) 叔母 (父の)



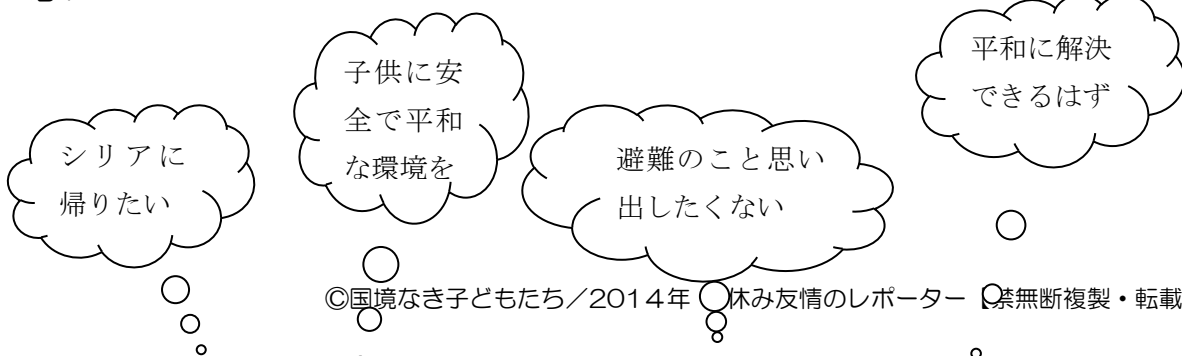
・家族の様子・

私がアンマン郊外で取材した三つの家庭のうち、正直言って、ここの家が一番環境が悪かった。日当たりの悪い薄暗い路地裏に家はあった。中に入っていくと、何匹かのハエが私たちを迎えた。そのあたりから、トイレのニオイのような臭いがして。最初は慣れなかった。でも、ワシームさんたちにとっては、これが当たり前…。ここの家に訪問して、私はショックを受けた。

・避難・



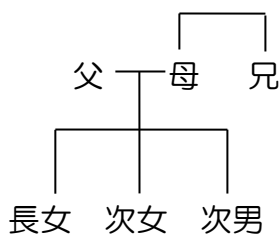
・思い・



この家族は、私たちに笑顔を見せてくれなかった。みんな少し警戒しているような、疲れた感じだった。取材中、私は涙が思わず出そうになった。「子どもに安全な環境を与えたい」とワシームさんが言った。きっと、もっと裕福な暮らしをさせたいのだろう。それをきいて、ふと日本での生活が私の頭を横切った。立派な家で、お母さんのおいしい料理をお腹いっぱい食べて…。この家族にも私の生活をしてほしい。そしてたってもっと笑顔のある家庭になるのか…。そんな気持ちがどっと自分に押し寄せたが、涙は我慢した。

訪問3

家族構成



- ・印象に残っている取材・

Q ヨルダンにきて大変なことは？

⇒アンマン近郊に来たばかりの時は、学校でシリア人として見られ溝ができていた。シリアの事を悪くいう子もいて、「お金を求めてきたんだろう」と言われた。シリア人の事を理解してくれる子もいれば、理解してくれない子もいる。

感 これは、その時初めて知ったことだった。友だちに少し悪口をいわれて、ヒーヒーしてしまう私には、絶対に耐えられないことだ。シリアのことも悪くいわれて、ノアちゃんは本当に本当に辛かったと思う。私はシリアのことを理解しているだろうか。

Q (お母さんからの質問兼) 他国の、シリアに対すること。

⇒他の国がシリアに干渉しすぎている。

そのせいで、今シリアが起きていること、というのがどんどんおおきくなってしまっている。

感想

今回取材した家族は、かなりオープンな方々だった。取材が終わったあと、お菓子をたくさんもってきてくれたり、スカーフの巻き方を教えてくれたりと、とても親切にしてくれた。ここの家族は生活にゆとりがあるようだった。そのせいか、お母さんや次男の笑顔がとても素敵だった。

しかし、取材中は一変した。みんなの表情はくもり、お母さんは涙を浮かべた。これを見て、(このまま取材を続けても良いのかな？自分のせいで笑顔がなくなる)と思った。

最後にお母さんが自分の家族の写真を見せてくれた。その中でお母さんが7枚の写真を私に見せた。私は最初、それが寝顔だと思って、はにかんだが、日本語で「この男の子は家の前に立っていた時に銃で突然撃たれて、死んでしまったのだ」という事を聞いて、強いショックと大きな勘違いをしてしまった私がとても情けなく思った。その写真は今も忘れることができない。帰り際に、和紙で作った紙飛行機をあげたら、喜んでくれた。

6. キャンプ内の学校

◆初めてみる、難民の子どもたちの学校◆

ザアタリ難民キャンプの子どもたちの学校を初めて目にした時、(え？ここが学校?)と思った。学校に入るときには、二重の門があり、中に入ると柵がいくつかあって、遊具や運動場はなかった。「工場」のような作りになっていた。通り交う子どもたちを見て、やっとここが学校であると確信したぐらいだ。この時私は、(これから自分と年の近い子どもたちに会いに行くんだ！どんな子がいるんだろう…)とこれから「はじまることにドキドキしていた。

授業見学

四日間はまず、女子のクラス見学に行った。学校の中は、白くて、意外にも綺麗だった。さっそくアラビア語の授業を受けているクラスにはいった。私たちが入ってくると、みんなの視線が一斉にきた。少し緊張した。教室では先生七人と大勢の生徒、前には黒板、どう日本と変わらない光景がみえた。生徒も全員、ちゃんと席に座っていて、元気よく手をあげていた。(勉強意欲は私たちよりもあるな。)と思った。つづいて、音楽の授業をしている教室に入った。ここは、さっきの教室とちがって自由な空気が流れていた。多分、音楽がもたらす空気の影響であると思う。私も千夏さんもそのときに生徒たちと会話をしたり、取材をすることができた。それからこの、クラスで自己紹介と日本の遊び紹介をした。私はお気に入りものとしてマトリョーシカを一つづつむいていくのをみんなに見せた。興味をもってくれたみたいで嬉しかった。その後、「せっせっせのよいよいよい」をそのクラスの代表の子と一緒にやってみた。日本の遊びをシリアの子がやっている！と思うと、教えて良かったな、とすごく思った。

思ったこと

意外と普通な学校だ、と最初は思った。でも、今はそう思わない。以前は、教室の天井を壊したり、授業をまじめに受けない子が多かった、と聞いた。それだけ、キャン

プでの生活に、ストレスが溜まっていたという事だ。見学した二つのクラスの中で、椅子にきちんと座って机に向かう授業よりも、実践も含めた、解放した音楽の授業の方が生徒たちの顔が明るくて（楽しそうで）良かった。KnK が音楽やスポーツの授業を開始させた、と聞いたがとてもナイスな考えであったと、私も思う。多くの人の苦勞と協力のおかげで成り立っている学校なのだと思います。

初めての出会い

この日私たちは、この学校に通っているウィサムとマラックという 13 歳の女の子に出会った。マラックは、「ようこそ。」「こんにちは。」など日本語で私たちを迎えてくれた。事前に準備してくれていたのだ。この 2 人とは、今後深く関わり合うことになった。

7. 遠足

《遺跡》

女子は、私はマラック、ウィサムを含む 5 人のシリア難民の子どもたちと遠足へ出かけた。男子は 14 歳（同じ年）のオマールを含む五人と出かけた。

道中にて

今回悩んだのが、バスの中で何をやるかだ。無言なんて絶対にだめだし、私たちが引っ張っていかなければ、と思い準備も色々していた。女子とはバスの中で「せっせのよいよいよい」を行った。みんな覚えが早く、帰りには、もう一通りできるようになっていた。それから「かえるのうた」の合唱を千夏さんと歌って見せたら、みんなノートにその歌詞を書き出して、一生懸命に覚えようとしていた。その姿を見て、（なんて真面目な子たちなのだろう。日本のこと、もっとしりたいのかな。）と思った。嬉しかった。男子とは指相撲をしたり、シリアの歌を私たちが聴いたりした。男子も女子も、私たちがさびしそうにしていたり、何も話さない時ができた時に、話しかけてくれたり、ビデオカメラで写したりしてくれたりしてくれた。私たちが引っ張るというより、彼女らがリードしてくれる形になった。

遠足にて

・自然との関わり・

今回の遠足で男女ともに、みんな「シリアの自然を思い出す」と言っていた。

ジェラシュもウナムカイスも、花や木が至る所に沢山あった。男子は、きれいなお花を摘んで私や千夏さん、みどりさんにわたしてくれた。たしかにザアタリキャンプにはこれという自然がない。（赤色の言葉）をきいて、自分がとても情けなくなった。私は、遺跡や自然を見ても、「わあすごいな。」と普通に關心しているときに、彼らは、懐かしいシリアを思い出した。

ていたのだ。

・仲良くなる・

少し緊張気味の私のそばにいて、話かけてくれたり、一緒に写真をとってくれたシリアの子どもたち。(シリアの子は写真を撮ってもらうのが好き)時間が経つと共に少しずつ仲良くなっていった。印象に残っているのは「笑顔」だ。男女共に目が合うと、ニコッと笑ってくれた。この時は、とても難民に見えなくて、みんな私の日本の友だちのように見えた。しかし、帰りのバスの中からザアタリキャンプが見えた時(ああ。この子たちの帰る場所は今はここなんだな。と思った。辛かった。

8. 難民キャンプ

～初めての難民キャンプ～

遠くからみるザアタリ難民キャンプは真っ白だった。初めてキャンプに入ったとき、(え、ここが難民キャンプ?)と思った。メインストリートを車で通ったが、お店がいくつも立ち並んでいた。売っている品物の種類も多くて、(アンマンの街とそんなに変わらないじゃないか。)と言うのが、初めてきて思った感想だ。

～キャンプの様子～

よく見たら、そんなこと全然なかった。ここはまさしく難民キャンプだ、と思いました。

- ・住宅と住宅の間隔が凄く狭い。
- ・地面は土や砂利で砂ほこりが舞う。
- ・水たまりが所々できていて、歩きにくい。
- ・ゴミが多い。
- ・全体的に衛生ではない。
- ・子どもが働いている。

以上のようなことをみつけた。わいわいとやっているように見えるが、その裏には苦勞や困難な事が沢山ある。今の生活に満足しなければ、と思った。電気はちゃんと通るようで電線はしっかりはっていた。

～キャンプを支えているもの～

ザアタリ難民キャンプを支えている団体、というのは、KnK の他にもたくさんあった。例えば「ユニセフ」。学校の行き帰りの子どもたちの背中には「unisef」と書かれた水色のリュック、テントなども支給されている。多くの団体が支援しているのだ。(こんなにたくさんの団体があって、支援の取り合いとかないのかな。)と思ったが、それぞれ分野が違うのでそういう事はないみたいだ。協力してみんなで支え

られたら良いと思う。

～キャンプにあるもの～

キャンプには、住宅の他、お店や学校、公園など色々な施設がある。もちろん配給場所もあった。公園には自分も立ち寄って、マラックとウィサム達と遊んだ。遊具とか、意外に種類があり(シーソーやブランコ、滑り台など)子どもたちも楽しそうだった。ここまでキャンプ内を色々整備して、外の世界に近い環境を作り出すためには、本当に大変な過程があるはずだし、今もなお改善し続けていると思う。

難民キャンプに行って

行ってよく見なければ分からない事が沢山ある。初めてキャンプに行って、パッと見渡した時の感想があのような感じだったように、日本で写真やビデオを見ただけでは分からない事が沢山あった。キャンプで生活している人たちは、みんな肩を寄せ合って生活している。それだから、今のこの生活にも我慢できるのだと思う。みんないつかシリアに帰れることを信じている。

9. ダーリアへの取材

遠足の時に、特に仲良くなることができた。ダーリアという13歳の女の子に、私は取材をした。

家族と住居

訪問時に家に居た人…六人(お兄さんが一人亡くなっている)

女系家族

住居の様子…プレハブ二戸とテント一つ。

テントはプレハブ二戸をつなぐ屋根の役割をしている。

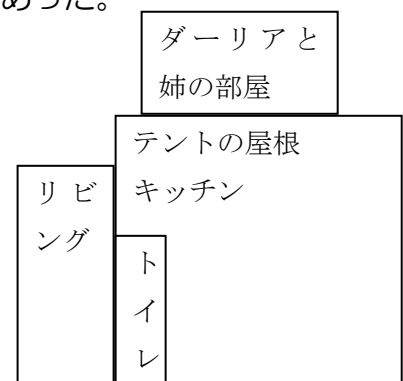
窓には鉄格子がついていた。

プレハブのうち一つは、ダーリアとそのお姉さんの部屋。

もう一つは、リビング。キッチンがテント下にあった。

キャンプにくるまで

- ・避難前に住んでいた所…シリアのダラーというところ
家を焼かれて避難
- ・避難した年…2011年(ダーリア 11歳、私 12歳)



教室の三分の二位の広さ

ダーリアの思いと私が思ったこと

私と会う時、いつも笑顔を見せてくれるダーリアも、質問が始まると、その数が少なくなっていた。ダーリアは、お兄さんを内戦で亡くしている。これを聞いて、私は驚いた。遠足の時も、女子の中で一番パワフルでオシャレ好きなダーリアが、こんな辛い事を抱えていたとは、正直思わなかった。それなのにダーリアは、お兄さんのことを、涙一つ見せないで語る。その時の表情は今も忘れられない。言葉ではうまく説明できないけれど、きりりとひきしまった。しっかりした表情をしていた。何か言葉をかけようと思ったが、その表情をみて、それは必要ないと思った。

それから印象に残ったことは、ダーリアが「シリアに帰ったら、それでザアタリ難民キャンプが恋しくなる」と言ったことだ。これを聞くと、ダーリアは他の子に比べて良い暮らしをしているからだと思う人もいると思う。でも私は違うと思う。ダーリアの住居は他の子と変わらないし、置かれている状況は同じはずだ。それなのにダーリアがキャンプに対してそんな思いをもっていたのは、ダーリアが「人」というものが好きだからと思う。彼女は、「キャンプで出会った友だちや、日本の友だち（友情のレポーター達）と会えなくなるのが寂しい」とも言っていた。また、友だちも多くて、みんなと仲良くしていたし、私にも積極的に話しかけてくれた。弟の赤ちゃんも、とっても大事そうに抱いていた。どんな人とも仲良くなることは、その人自身が「人」が好きで、仲良くしたい、と思わなければならない事だと思う。ダーリアはまさにまれたと思う。「キャンプに戻りたい。」この驚きの気持ちを知って、私はダーリアの心の広さと優しさを知った。また、私はダーリアのようになりたいと思った。どんな人とも仲良くなれるダーリア。強い心を持つダーリア。彼女はきっとシリアに戻ったら、シリアを引っ張っていく存在になるのではないかと勝手ながら私はそう確信した。と同時に、ダーリアの持っているものは、私にはないものであり、できないことだ。ダーリアに出会って良かった。

私が伝えた事

このダーリアとの取材までに、私は多くの人に出会い、その人から辛い過去を聞いたり、KnKへ感謝の言葉をもらったりした。しかし私は、自分の気持ちを伝えることにした。

私は小さい頃から今日まで、いろいろな人に甘えて生活してきました。だから、頑張っ
てシリアという遠いところから避難してきて、慣れない生活にも我慢して前向きでい
られるダーリアは、私よりもはるかに凄いとします。ダーリアやシリアの人たちに
会ったおかげで、自分を変えることができそうです。ありがとう。

というようなことを、自分の小さい頃からの写真を見せながら伝えた。風邪をひいて、
取材ができなかった子もいるけど、ここでしっかり自分の気持ちをダーリアに伝える

事ができて本当に良かったと思う。

ダーリアからは、ダーリアのことを日本の子どもや私の家族に伝えてほしいという事だった。

10. 今私が思う事は（まとめ）

「感謝」この言葉が今回の取材のキーワードとなった。

取材前、友情のレポーターになる前の私は、シリアのこともそこから避難してキャンプに住んでいる子どもたちの事も、何も知らなかった。しかし、世界には自分よりも窮屈な思いをしている人が沢山いるという事は知っていた。写真でも見て辛くなるようなものをいろんな場所で見してきた。その度に私は、（今あるものを大切にしよう）と思っていた。しかし、家に帰ればすぐに姉とけんかをする私。せっかく、勉強する時間があるのに誘惑に負けて勉強しない私。分かっているも実行に移せない毎日が何日も続いた。そんな時、私は国境なき子どもたちの友情のレポーターになった。初めてのヨルダン。初めての難民キャンプ。この渡航で何か変わるのではないか、という期待はあった。今回の取材で、一番辛かったことは、「シリアの人たちがみんな私たちにすごく優しく、笑顔で接してくれたこと」だった。普通に考えれば、これは当たり前といつか、良い風にとらえられるはずだ。しかし、私は取材中、これが少し辛かった。シリアの人たちは、愛する人を奪われ、愛する家を奪われ、そして生まれて育ってきた故郷を奪われた。さぞかし怖い思いをしたと思う。

いつ殺されるのか、そんな不安を胸に抱きながら、ひたすらヨルダンへ向かった。私と会うまでに彼らが背負ってきたものは、はるかに重いはずなのに、笑顔を見せてくれる。本当はずっと悲しさを抱いているのに。そう思うと、彼らが無理をしているように見えて、私には苦痛だった。申し訳なかった。

ザアタリ難民キャンプ内には学校があり、今回友達になった子は皆学校に通っていた。ダーリアは、放課後、自分でまた勉強するのが楽しいと言っていた。シリアの子どもたちにとって学校で勉強するというのは幸せなこと、という事がよく分かった。では、自分はどうか。毎日いろいろな壁にぶつかり、中学校に嫌々行くこともあった。時計ばかり気になって、授業が終わるのを今か今かと待ち望む私。本当に本当に自分が情けなく思った。同年代の子供たちから学ぶことは、山ほどあった。

友情のレポーターの任務は、「現地の子供と友情を育むこと」「日本に、取材したことを伝えること」の二つだ。取材を通して、お互いの立場を理解しながらも、しっかり友情を育む事ができたと思う。でもまだ、私は「伝える」という大きな仕事が待っている。シリアの人たちが今背負っているもの、これからも背負っていかねばならないこと、というのは本当に大きいものだと思う。今この瞬間、私が会った人の誰かシリアを思い出して、一人で泣いているかもしれない。友だちの一人として、私が背中をさすってあげたい。「私がついているよ。」と言ってあげたい。でもそれは、国境がなくても、どうしてもできないことだ。そんな私ができること、それは一人でも多

くの人に、シリアの人の思いを現状を伝えること。ヨルダンに行って、いろいろな人と出会って、自分の夢が新たに変わった。今の私の夢は「医者としてMSF（国境なき医師団）に入ること」そして、「今の自分から成長して、立派な人間になったら、平和が戻ったシリアに行き、今回の渡航で出会った人たちに幸せに生活している人達に会いに行くこと」だ。夢を見つけさせてくれたシリアの人々に私はとても「感謝」している。本当に感謝感謝の旅だった。だからいつか恩返しできるように、今自分が出来ることをする。

11. 「私」をかえてくれた方々

あきさん

キヨさん

みどりさん

歩さん

とうこさん

フルートさん

サレムさん

ジャミラさん

国境なき子どもたちの、みなさん)

ダーリア

マラック

ウィサンム

マラック

ブシュラ

ヌセイバ

オマール

ジャーキー

アーズィー

ハンム

アハマン

先生方 私が出会った全ての人

本当にありがとうございました。

Thank you

2014年春休み友情のレポーター 太田 成美

2014年春休み友情のレポーター ヨルダン取材レポート

佐々木 千夏（岩手県／当時 16歳）

3月23日。私の故郷釜石は、まだ肌寒く、コートを着て駅へ向かった。電車の中で私は一人、これからどんな事が起るんだろうと期待に胸を膨らませていた。

ヨルダンの首都アンマンに着いた頃には次の日のお昼だった。照りつける太陽が眩しい。初めての海外。私は日本で嗅いだ事のない匂いを感じていた。アンマンは思ったより栄えていて、人通りもにぎやかだ。ダウンタウンでスカーフ選びをして、KnKからのプレゼントとして頂いた。この国では女性は皆ヒジャブ（スカーフ）で髪を隠している。この国に限らず、イスラム圏は皆そうだ。とはいえ少し歩いただけで顔回りが暑い。真夏の事を考えるだけで、汗が噴き出しそうだ。

25日。朝から東アンマンへ向かった。煙臭い工場地帯を抜け、住宅街へ来た。私のシリア難民取材が始まった。取材を受け入れてくれた家庭の奥さんが、私のを部屋へ招き入れてくれた。せっかく覚えたアラビア語の挨拶も、緊張してすぐ出て来なかった。ここの旦那さんは政府側に逮捕されていた時の話をしてくれた。手の傷跡をさすりながら話すその瞳は陰しかった。どうして罪を犯していないのに、と思った。しかし紛争という状況の中で敵見方区別されるのは当たり前だ。考え方の違いというのは時に残酷だ。罪に値するのだ。排除されるかされないか。争いを止める方法は他に無いのかとおもった。が、それが出来ていたら紛争など起こっていないだろう。

この日は合計で3軒の家庭を訪問させて頂いた。私が一番聞いたかった質問「宗教や宗派が違う人の事をどう思いますか？」は、ナイーブな質問だから、と誰もが躊躇った。しかし通訳を担当してくれていたフルートさんは上手く訳してくれた様で、皆さん気分を害された様子も無く答えてくれた。3軒全ての家庭で「紛争が始まる前は気にした事もなかった」という事が聞けた。やはり色々な考えを持った人が居る。共存している。それがほんの少しのきっかけで、交流出来なくなってしまう事。それがどんなに悲しい事か。フルートさんに聞いてみたら、宗派が違うとしても普通に結婚も出来るそうだ。紛争という初めは小さな綻びであったであろう出来事が、誰かの大切な何かを大なり小なり奪って行く。その瞬間、友だちだった人が“自分とは異なる人”とカテゴライズされてしまうという事。

以前、山本美香さんの著書に「戦争はちょっとした仲間外れの延長線上」といった旨が記されていた。考え方の違い。属するグループの違い。そんな事が争いに何処か通じている様な、そんな気がした。

同時に、取材をする上で家族と暮せる事がどんなに幸せかを教わった。家族が無事生きていること。これに代えられる物なんて無い。

26日。ホテルから車で1時間程かけてザアタリ難民キャンプへ向かった。酷い砂

嵐だ。目がしょぼしょぼした。地面からの照り返しが眩しくて、目を開ける事もままならない。キャンプにはいくつか学校があった。これからも増えるらしい。キャンプの人口は増え続けている。学校に通わなければならない子が沢山居る。私がクラスへ入ると、珍しそうに皆こちらを見ている。英語が上手な子が多く積極的だ。私の名前を口々に練習していた。「ちなちゅ?」「ていなとう!」とても可愛かった。KnKのクラスで演劇を担当しているマルワ先生は、ちな!と呼んでくれた。初めて会う子どもたちにドキドキした。友だちになるマラックは沢山日本語を覚えてくれていて、すごく嬉しかった。自己紹介で横笛を吹いた。結局行く先々で吹いたけれど、予想以上に喜んでくれた。マラックが「笛を吹いて」と何度もジェスチャーで頼んでくるのが嬉しくて、横笛は私の宝物になった。

27日は女の子たちと遠足。クラスで話したマラック、ウィサムにブシュラ、ダーリア、又セイバ。そして引率にマルク先生。遺跡巡りは暑かったけど、皆が自然や遺跡がシリアには沢山あってシリアを思い出す、と言っていたのが印象的だった。ヨルダンに殆ど自然が無い。木々と触れ合う喜びが、私にはよく分かる。又セイバが遺跡の帰り際、手を繋いで来た。何か話しかけてみようかな?と少し考えている時、又セイバだけハンバーガーを食べずにいた。お腹空かないのかと心配しているとポテトだけ食べ、ハンバーガーを眺め一口食べると、箱にしまい、大事そうにバッグにしまっていた。ああ、持って帰るのか…と納得した。私は疲労もあって食べ切れず残してしまった。何だか心が痛かった。一つのハンバーガーを分けて食べるのだろうか。幼い兄弟とでも。又セイバと話すことは殆ど無かったけど、彼女はとても心に残っている。繋いだ手の温もりが、今も忘れられずにいる。遠足の別れ際、又セイバは私とハグした後笑顔で何か呟いた。分かってあげられなくてごめんね、と思ったけど、きっと心は通じ合えた。友だちになれた。

28日、男子との遠足でも遺跡へ行った。眺めの良い場所が沢山あった。木登りをする男の子たちが眩しかった。女の子ともやっぱり違うけど、皆良い子で仲良くなれた。花を摘んで来てくれた。何もかもが嬉しかった。見はらしの良い場所からシリアの方向を見た。いつ帰れるんだろう。そんな想いが頭を過ぎる。

男の子たちに取材をした時は女の子より口数が少ない気がした。それでも誰かしらすぐ答えてくれた。

29日はキャンプ体験をしにマラックとウィサムの家に行った。マラックの家、キャラバンでお手伝いをした。マラックは働き者で、てきぱきと洗い物やゴミ拾いをこなす。取材をして、釜石の写真を見せてあげた。私にとってもこの写真集はヨルダンに来てから宝物になった。皆に、故郷の大切さを教えてもらったから。

ウィサムのテントは暑かった。大家族がテント一つで暮らしているという状況に驚いてしまった。こんなに厳しい生活を一年。毎日テントで暮らし、水汲みをする。耐えられるだろうか?

30日は遠足で仲良くなったジャミールとオマールの家へ取材に行った。最初の取

材、郊外家庭訪問でも感じた。“罪が無い人が囚われの身になる事”への理不尽さをオマールのお父さんの話でも感じた。オマールが話している時の真剣な眼差しが、今も瞼の裏に焼き付

いている。あれは泣くのを堪えていたのかもしれない。何処か1点をじっと見つめ話す彼は、どこまでも真っ直ぐだった。

ジャミールはシリアのどこが好きか尋ねると、大粒の涙を落した。その何個か前の質問から、彼の目に涙が浮かんでいるのに気付いた。一瞬、「これ以上シリアや辛い事を思い出させるのは止めよう。可哀そうだ。」と思った自分がいた。でも目を逸らしてはいけないと思った。その先を聞く事が私が此処に来た意味なんだ。彼が見た物、経験した事を持ち帰らなくちゃ。そう思うとどうしようも無く心が痛かった。苦しかった。彼等はずっと辛い想いをしてきたのに、その傷を抉ってしまうような気がして心が痛かった。

でも私は自分の経験から感じた事、シリアの人たちもまた歩き出せると思っている事を伝える事が出来た。他人の過去を聞く、取材というものの厳しさを知って思い悩んだけど、全ての取材を終えた私に後悔は無かった。完璧じゃなかったかもしれない。拙い言葉で伝えようとした想いは、きっと通じた筈だ。

こうして私はレポーターとしての仕事に終わりを告げた。ジャミールが言っていた「シリアは愛すべき故郷」ジャミールのお父さんの「故郷はお母さんみたいなもので変える事は出来ない」という言葉。全てが私の胸で静かに光っていた。

今日で全部終わるんだ。乾いたザアタリの風を浴びて歩く事ももう無い、と思った。そう思うと、確かにそこに生きた、もう2度と会えないであろう人への愛しさで心が詰まって苦しかった。帰りの新幹線の中で久々に1人ぼっちになって、初めて号泣した。悲しくて嬉しくて、何が何だか分からなかった。

ただ、「変わりたい」と思った。

私は君達に、何を残せただろう？

幼い命はいつ外の世界を知るのだろうか？

どうしたら尊い命が失われずに済むのだろうか？

「今」感じた事は「今」しか書けない事、伝えられない事

それが何より大切な「今」である事

明日がある為に「今」がある事

それを皆に教えてもらった。

次会う時は、願わくは平和になったシリアで。きっと、笑顔で。

2014年 春休み友情のレポーター 佐々木 千夏